

## 無人の実家、奪われたままのふるさと 福島県大熊町・門馬さんの思い

東京新聞 2021 年 1 月 11 日 配信



中間貯蔵施設の敷地内、土のう袋の山に囲まれた門馬好春さんの実家(手前左)  
奥は事故収束作業が続く東京電力福島第一原発=福島県大熊町で(ドローンから)

黒い土のう袋(フレコンバッグ)が6段重ねで積み重なる。その山に取り囲まれるように、木造の民家がぼつんと残る。2階の窓から海側に目を向けると、林の向こうに東京電力福島第一原発(福島県大熊町・双葉町)の構内にある建物が見えた。

### ◆生まれ育った家、原発から200m、帰還困難区域に

原発からわずか200メートル、大熊町にある民家を、ここで生まれ育った門馬好春さん(63)＝東京都渋谷区＝と一緒に訪ねた。一帯は1600ヘクタールと広大な中間貯蔵施設の敷地内で、県内各地から放射能で汚染された土入りの土のう袋が運ばれてくる。町の許可なしには入れない帰還困難区域だ。

「ほい、ただいまー」。全身白い防護服を着た門馬さんが、ツタがはう玄関をくぐって言った。返事はない。

### ◆「子ども時代、父親のひざの上で眺めた風景」

あの日から、無人となった実家への帰省は1年2カ月ぶり。玄関先に腰掛け、足をぶらりとさせた。「一番落ち着くんです。子ども時代に父親のひざの上で外を眺めたからかなあ」 実家で暮らしたのは18歳までと、福島第一原発などの施設運営に関わった25～30歳。東京で暮らしていても、実家で作る米を食べ続けた。「マツタケ、ドジョウ、食う物はいっぱいあった」。田園風景の面影は消えつつある。

### ◆東京都心の100倍の空間放射線量、長くいられず

玄関先に座るのは、帰省のたびの習慣だ。原発事故前、30～40分は座ったが、今は5～10分になった。空間放射線量が東京都心の100倍近い毎時3マイクロシーベルトほどあり、長くいられない。視線の先に、高さ3メートルほどのやぶが茂る。「おやじが裸一貫で築いた田んぼなんです」。今は耕すこともできない。



「一番落ち着くんです」と玄関に腰をおろす門馬さん

「戦争は故郷までは持っていかなかったけど、原発事故は実家も故郷も奪ってしまった」。やぶの先の原発では、終わりの見えない事故収束作業が続いている。(署名記事)



東日本大震災と福島第一原発事故からあと2カ月で10年。被災した人々と被災地の今とこれからを、随時伝えていきます。



外の景色を見つめながら故郷について語る門馬さん

## 「先祖伝来の土地、被災者だますようなことはいけない」 地権者団体会長

東京新聞 2021年1月11日 配信

東京電力福島第一原発(福島県大熊町・双葉町)のすぐそば、大熊町にある門馬好春さん(63)の実家を訪ねたのは昨年12月19日。冬でも温暖で知られるが、雪がちらついた。「こっちは雪、ふんねえだもん、ほんとは」。いつもは標準語の門馬さんがこの時は方言になった。(署名記事)

### ◆帰省の際には必ず仏壇に手合わせる

防護服姿の門馬さんは水色のビニールを靴にかぶせて部屋に入ると、金色に輝く大きな仏壇の前に座った。帰省の際には必ず手を合わせる。仏間のほりには、遺影のない額だけがぶら下がる。

3人きょうだいの3番目。子ども時代は貧しく、農家の父親は冬に出稼ぎをした。鍋の具が白菜ばかりの日も多かった。鶏が卵を産めなくなると、その肉を食べた。屋根まで逃げる鶏もいたが、「こちらも必死ですよ。鍋に鶏肉が入るかが懸かっていたんだから」。そんな生活



仏壇に手を合わせる門馬さん

は、原発の建設で変わった。父親が、1971年に営業運転が始まる福島第一原発建設に関わるようになると、出稼ぎはなくなった。門馬さんは飼っていたヤギの乳搾りをしなくなり、牛乳を買えるようになった。

### ◆家と土地、汚染土を保管する施設の候補地に

原発事故が起きた10年前、父親は既に亡くなっていた。あの日、門馬さんは神奈川県内の職場にいた。実家の家族に電話がつかない。原発で水素爆発が起き、不安ばかり募った。みんなの無事を確認できたのは数日後だった。避難指示で主を失った家と土地は、放射能で汚染された土を保管する施設の候補地になった。「汚染土は早く回収すべきです。大熊、双葉の人が避難先でお世話になっていますし」。国の事業には賛成の立場だ。ただ、それは国が「30年以内に県外で最終処分するという約束を果たすことが条件」と念を押す。

### ◆「最後は金目でしょ」石原環境相の発言に怒る

中間貯蔵施設という事業で国は当初、福島第一周辺に広がる1600ヘクタールの国有地化を目指した。「最終処分場にされるのでは」と懸念する地権者ら住民に対し、国は説明会を開いた。その直後の2014年6月、石原伸晃環境相(当時)が「最後は金目でしょ」と口にした。地権者らは一斉に反発。国は全面国有化を断念し、地権者が土地を国に売るか、貸すかを選べるようにした。だが、これには国に有利な面が隠されていた。気付いたのは、門馬さんらが14年末につくった地権者会。土地を貸す地上権の契約書に「国が期間を自動延長できる」条文があり、環境省との



家の様子をカメラに収める門馬さん

交渉で修正させた。土地を貸す場合の補償が国の統一ルールに書かれていない方法で算定されたことも問題視。「国有地化に応じた方が有利な補償になっていて、国の都合の押しつけだ」と訴える。

#### ◆地権者会と国の議論、6年たっても平行線

会長を務める地権者会と国との議論は、6年たっても平行線だ。地元の同級生からは「何やってんだ」とあきれられたこともあったが、経緯を説明すると応援してくれるようになった。「先祖伝来の土地を使うんだから、被災者をだますようなことはいけない」。家を囲む土のうの山の前にダンプが列を作る。鈍いエンジン音と鳥の鳴き声が響く中、門馬さんははっきりと言った。



1年2ヵ月ぶりに実家を訪れ、玄関前に立つ門馬さん

## 福島県外の最終処分、候補地探しも始まらず 汚染土など東京ドーム11個分超える

東京新聞 2021年1月11日 配信



中間貯蔵施設の敷地は東京電力福島第一原発(上)に接している。上空からは分別や容積を減らす施設の白い屋根が見える=2020年10月21日、東京新聞社ヘリ「おおづる」から

東京電力福島第一原発事故によって福島県内で出た汚染土の中間貯蔵施設について、国はこれまでに公有地を含む候補地1600ヘクタールの75%を取得した。民有地に限れば91%の1150ヘクタールが契約済みだ。各地から汚染土搬入は進むが、国が2044年度までの完了を目指す県外での最終処分は、候補地探しも始まっていない。

### ◆公共事業の盛り土などに再利用する方針

環境省によると、中間貯蔵に搬入予定の汚染土や草木は1400万立方メートル。東京ドーム11個をいっぱいにしても足りない量だ。うち8割は、45年までに放射性物質の濃度が1キロ当たり8000ベクレル以下になるとして、環境省は公共事業の盛り土などに再利用する方針を示している。ただ同省が示した再利用の基準値は、原子炉等規制法に基づく規則で「放射性廃棄物」とされる1キロ当たり100ベクレル以上という基準より80倍も高く、反対意見が根強い。同省は「適切な管理の下で行う」と理解を求めると、管理の手引きは19年に案が示されたまま、固まっていなかった。

最終処分地の候補地探しは、廃棄物に含まれる放射性物質を高温加熱などで濃縮する方法を24年度までに絞った後に始まる予定。環境省の大野皓史参事官補佐は「安全に処分できる技術的なベースを確かめる必要がある」と話す。

### ◆帰還困難区域で除染、さらに増える汚染土

帰還困難区域の多くは除染の予定がないが、地元自治体が要望する全域除染が実現すれば汚染土はさらに増え、必要となる最終処分場の容量にも影響する。国が自治体の要望を受け入れるかは不透明だ。

地元住民からは「どうせ運び出せない。最終処分地になる」とあきらめの声も聞こえる。30年以内の県外搬出について、小泉進次郎環境相は「地元との約束だ。必ず守れるように取り組む」と説明している。(署名記事)

### 用地取得率の推移

※20年は11月までの数値(%)



### 中間貯蔵施設への汚染土の搬入量

※19年までは3月時点の数値(万m<sup>3</sup>)



## 味覚、嗅覚を失い、そして自宅も 福島・大熊町の元そば職人 原発事故の苦しみ解き放つ和太鼓のリズム

東京新聞 2021年1月13日 配信

ドン、ドン、ドン。和太鼓の重低音が体を震わせる。東京都町田市のある音楽スタジオで、バチを握る高山恒明つねあきさん(65)は一点を見つめていた。「何もかも忘れて無心になれる」。東京電力福島第一原発(福島県大熊町・双葉町)事故に翻弄されて味わった苦しみからも、解き放たれる瞬間だ。原発から5キロ、大熊町内でそば店を営んでいた。そば職人にあこがれ、28歳のときに脱サラ。同町内で妻の

実家近くの土地を探し、横浜市から移住した。「季節ごとにそば粉の産地を変え、だしのかつお節は甘みがあって臭みが少ない一本釣りしたカツオだけを使った。お客さんの笑顔が見たくて、品質にこだわった」。懐かしそうに語る顔は、どこか誇らしげだ。東電や下請け企業の社員らが接待で頻繁に利用し、店は繁盛した。2週間先まで予約が埋まるほどだった。そう、あの日までは。

#### ◆6万円かけて宇都宮へ

2011年3月11日午後2時46分、東日本を激しい揺れが襲ったとき、福島県大熊町のそば職人だった高山さんは、親族の法事でさいたま市内にいた。4日後、羽田空港から福島空港へ飛行機で移動し妻と母が避難する福島県三春町で合流した。タクシーで「なんとか福島県を出よう」と予約が取れた宇都宮のホテルへ。「渋滞して9時間、6万円ぐらいかかった」と振り返る。

避難先を転々とし2カ月後に親戚の紹介で埼玉県越谷市のアパートに入居した。一息つく間もなく、自身の体に異変が起きる。何を食べても味がしない。「妻が疲れて味付けがおかしくなっているのかなと思い、言い出せなかった」

#### ◆「避難のストレスかな」

同じ年の12月ごろ、一人で留守番をしていると、帰宅した妻が叫んだ。「どうしたの!」。石油ストーブの暖気をこたつに送るビニールホースが焦げた臭いが充満していた。味覚と嗅覚をほぼ失っていた。2年ほど無味無臭の暮らしを強いられた。「避難のストレスかな」と感じたが、原因は不明だ。今も治療が続けるが、料理人としての感覚には程遠いまだ。「料理番組を見ていると『おれだったらこうするなあ』と思っちゃう。それで『あ、おれ、味が分からねえからできないか』って。すごく切ない」。そば屋の復活は難しかった。

ハローワークで仕事を探したが断られ続けた。「年齢的に自営しかないのでは」と思い、たまたまインターネットで太鼓教室の運営者を募る広告を見つけた。

#### ◆消えた不眠の悩み

まったく無経験だったが夫婦で太鼓を体験してみると、不眠に悩まされていた妻がその夜はぐっすりと眠れた。「太鼓も人の笑顔が見られる仕事なのかも」。13年5月、東京都町田市で太鼓教室「TAIKO-LAB 町田」を開いた。講師を雇いながら、自身も生徒となり学んだ。生徒の笑顔にやりがいを感じるようになった。ただ「町田の家に帰っても他人の家に来たようで『ただいま』と言うのがいまだに変な気分」だという。帰還困難区域にある自宅兼店舗は17年春に取り壊した。「さみしくなるから」と立ち会わなかった。そば道具も他人に譲った。不動産業者から送られてきた更地の写真を見て思った。「これで、そば職人としての人生は終わった」2018年、東電による精神的苦痛に対する賠償が打ち切られた。「時間がたてば傷は癒えると東電は考えているのかもしれないが、それは大きな間違いだ」

#### ◆「全ての家を建て直して」

忘れられない光景がある。「あの日」よりもずっと前、福島第一原発での作業ミスを記者会見で謝罪した東電幹部が、その日の夕方に来店した。「下請けがどうしようもねえんだよ」と笑っていた。未曾有の原発事故を起こしても、東電の体質は変わったようには思えない。「福島の汚染をゼロにして、全ての家を元通りに建て直し、原発も更地にして住民に返してほしい。それが事故を起こした当事者としての責任じゃないんですか」(署名記事)



太鼓教室のフランチャイズオーナーになり、太鼓の練習をする高山恒明さん(手前左)



原発事故前の2010年9月、営業していたそば店で、そばを打つ高山恒明さん(左)。取り壊す前のそば店「蕎麦切りたか山」(右)=いずれも高山さん提供



# 車頼みの生活、体が動かなくなったら…不安抱えながらも故郷へ 東京から南相馬に戻った木幡さん夫婦

東京新聞 2021年1月25日 配信

母屋裏手の杉やケヤキは秋になると、家の周りに落ち葉を積もらせる。掃き掃除が欠かせない。「この秋は5回ぐらい燃やした。大変なのよ」木幡堯男さん(83)と妻孝子さん(79)が、長く避難生活を送った東京・東雲しののめの団地から故郷の福島県南相馬市小高おだか区の自宅に戻り、もうすぐ2年。季節の移ろいは、東京での35階の部屋では遠く感じたが今は、すぐそばにある。東日本大震災前は自給自足の生活を送っていたが、コメも野菜も作らなくなった。玄関前に広がる7000平方メートルの畑は、ブロッコリーを栽培する会社に貸している。田んぼには、太陽光発電のパネルを設置した。



自宅前でたずむ木幡堯男さん、孝子さん夫妻。季節の移ろいは、東京にいたころより身近に感じられるという＝福島県南相馬市小高区で

## ◆地区100軒で戻った住民は3分の1

小高区は、東京電力福島第一原発事故で全住民の避難を強いられた。避難指示解除から5年。木幡さん夫妻が住む地区は震災前、3世代で住む家も多かったが約100軒のうち住民が戻ったのは3分の1。それも高齢者が夫婦か、1人でだ。南相馬市は沿岸部が津波で甚大な被害を受け、南側の小高区と原町区の一部の住民は東京電力福島第一原発事故による避難まで強いられた。避難指示解除後に戻った住民は高齢者が多く、車に頼る生活。体が動かなくなったらどうしたら…。不安と隣り合わせの日々を送る。JR常磐線の小高駅前是人通りがまばらだった。建物の解体も進み、あちこちに更地が目立つ。医療機関だった建物には「売物件」の看板が掲げられていた。不便な町になぜ戻ったのか。避難先の東京から2019年1月末に小高に帰ってきた木幡堯男さんは「帰りたい気持ちはうまく表現できない。生まれ育ったところに戻る習性があるのかも」と複雑な胸中を明かす。堯男さんと孝子さんの2人は、週1回、15キロ離れた原町区の中心部へ車を走らせる。日用品の買い出しだ。小高区には今は、小さなスーパーとコンビニしかない。東京都江東区の国家公務員宿舎「東雲住宅」で避難生活をした8年間は、買い物も便利だった。東京に住む3人の子どもや孫とも気軽に会えた。



JR常磐線小高駅の駅前通り沿いは建物が解体され、更地が目立つ＝福島県南相馬市小高区で

## ◆表向きは以前の生活に戻ったようでも…

新型コロナウイルス禍もあり、去年はほとんど子や孫に会えなかった。「表では前の生活に戻ったような感じがすつけども。みんな見えないけど悩み持ってんだよ」。堯男さんはぼつりつつぶやいた。1人になったら、体が動かなくなったら、ここで暮らせるのだろうか。木幡さん夫妻は時折、不安になる。最後は施設か、と思っているが「切羽詰まったことを私は考えないほうで、直面した時に慌てるたちのよ」と堯男さんは静かに笑う。堯男さん宅から山側に3キロ、一人暮らしをする佐々木清明さん(95)は木幡さん夫妻と昔からの知り合いだ。代々受け継ぐ山林の木材を売り、養蚕や稲作をして生きてきた。自宅裏には大切に生きてきた樹



齡400年の杉が立つ。震災前、同居していた長男夫妻は、家の隣で花の卸販売を手掛けていた。今は栃木県那須町に拠点を移し事業を拡大させた。「マイナスばかりも言えん。向こうは都会からいっぱい観光客がくつから」佐々木さんは運転免許を返上し、愛車の電動アシスト自転車で、小高区中心部に散髪に行く。足腰は元気なものの「毎日、家の中でもの探すだ。なんか使って置いたら場所分かんねんだ」。買い物はヘルパーにお願いする。堯男さんら近隣の人が気に掛けて訪ねてくる。「お客は結構あるから寂しくはねえべさ」。でも、家族や地域がバラバラになった悔しさは忘れない。近い将来への不安を抱えながら、自力で動ける人が故郷に戻っている。「農業一つとっても、再開したとしても後継者がいない。小高をどんな町にしたいか、行政もビジョンが明確じゃない」と、小高区行政区長連合会の林勝典会長(73)。5年後、10年後の町はどうなっているのか。住民たちも分からないままだ。(神谷円香、写真も)



車を運転して小高の中心部に来た木幡堯男さん(左)と佐々木清明さん、堯男さんの妻孝子さん＝福島県南相馬市小高区で



自宅でくつろぐ木幡堯男さん(左)、孝子さん夫妻。庭の向こうには今は貸している畑が広がる

## 「少し長すぎた…でも！」大熊町に商業施設、今春オープンへ

東京新聞 2021年1月26日 配信

東京電力福島第一原発があり、帰還困難区域が残る福島県大熊町では今春、飲食店や小売店計9店舗が入る商業施設ができる。だが原発事故による長期避難の影響で町民の帰還は進まず、商店再開のハードルは高い。店主らは「10年は少し長すぎた」とこぼす。町内の仮設店舗で再開した店は客の少なさに直面しながらも「お店がない町はありえない」と奮闘する。(署名記事)



今春のオープンに向け復興住宅の脇で建設が進む商業施設＝いずれも福島県大熊町で

### ◆長期避難で商店再開に高いハードル

町の中心部だったJR常磐線の大野駅前「フラワーショップはなさく」を営んでいた町商工会長の蜂須賀礼子さん(68)は、店を再開できずにいる1人だ。事故前は葬斎場など向けの花が収入の柱だったが、近場での葬斎場再開が少ないうえ、ブランクも重くのしかかる。「スタンド花は50本挿して水も入れる。持ち上げるのに筋肉がどこまでついていけるか…」生花店は小学生のころからの夢だった。高校卒業後、仙台市の生花店で経験を積み、1984年に開店。花に保護材を吹き付けるなど一手間を欠かさず、地元客らに信頼された。「夢の完成品を作ろう」と、客がくつろげる喫茶スペースの併設を考えていたとき、事故が起きた。店がない今も、知人らは「事務所のテーブル花、作られっか？」と注文をくれる。「たまに自分の



大熊町商工会の連絡事務所で書類を見る蜂須賀礼子会長

屋号で領収書を書くと、うれしいですよ」とほほ笑むが、避難先などで屋号を浸透させるには何年もかかる。「町に戻ったら花屋をやろう」と思ううち、還暦前だった年齢は古希が迫る。「あと10年若かったら、まだ働けた。お仕事していたら70歳でも80歳でも続けてただらうなと思います」

#### ◆2019年4月まで全住民が避難…戻った商工会員は6%

全住民の避難が2019年4月まで続いた大熊町では、町内で営業する商工会員が全体の6%の15事業所だけ。35%の会員は町外でも営業再開できていない。避難先で定着した町民も多く、今年1月1日時点の町内人口は285人。事故前の「お得意さま」はなかなか戻らない。商業施設が開業しても、厳しい経営環境は続く。2019年7月、町内の仮設店舗で一足先に営業再開した2店舗は、復興関連企業などとの取引に支えられている。電器店「滝本電器」は企業にテレビや冷蔵庫などを納める。4年ほど前に福島県いわき市に建てた自宅から片道1時間かけて通う滝本真照さん(79)、英子さん(67)夫婦は「企業の仕事が結構、あんです。私たちは運が良かった。この商売だからできた」と語る。



仮設店舗でテレビなどを販売している滝本電器の滝本真照さん、英子さん夫婦

#### ◆見せる、個人商店の底力

日用雑貨を扱う鈴木商店の4代目鈴木真理さん(39)は「草ぼうぼうだった町がちょっとずつきれいになり始めている」と前を向く。新たな商業施設では品ぞろえを「女性が見て楽しい雑貨」に変えるが、トイレトーパーなどの日用品も在庫に持つ。10年前のあの日、真っ暗な店内を足でかき分けて、ろうそくや紙おむつを来店した人たちに渡した。「代金は『後でいいよー』って言って。そのままの方もいます。でも、いいんです。個人店って意外と頑張るんですよ」



仮設店舗に日用雑貨を並べている鈴木商店の鈴木真理さん

## 福島・浪江町の大堀相馬焼職人 逆境乗り越え再開に苦闘

東京新聞 2021年1月31日 配信

「焼き物に申し訳ねえ」福島県浪江町の伝統工芸、大堀 相馬焼の職人だった長橋明孝さん(81)＝東京都江東区＝は2020年11月末、帰還困難区域のままの同町大堀の工房でうめいた。地震の揺れで床に落ちた焼き物が、足の踏み場がないほど散乱したまま。歩く度に「バリン、バリン」と割れる音がこだまする。屋内でも放射線量は毎時3マイクロシーベルトほど。国の長期的な除染目標(同0.23マイクロシーベルト)の13倍の水準で、線量計の警報音が鳴りっぱなしだ。「10年前からなんにも変わらん。これが現実よ」大堀で生まれ育ち、10代のころから家業を手伝った。粘土から湯飲みを成形するのに1分間もかからず、1日500個ほど作った。すぐに作業に取りかかれるよう、常にシャツを腕まくりして暮らしていた。原発事故後、東京都江東区の公務員宿舎「東雲住宅」に入居。昨年、その近くに移り住んだ。「いつか戻って焼き物をやれたらいいが…。年齢的にはもう難しいと思う。それでも、ぬれた土に触ることのない高層マンションの自宅でも、腕まくりはしてしまう(署名記事)



帰還困難区域にある工房で大堀相馬焼の陶器を整理する長橋明孝さん

## ◆突き動かした使命感

福島県浪江町で江戸時代初期から続いてきた伝統工芸の大堀相馬焼。窯元は今も放射線量が高い帰還困難区域内にあり、東京電力福島第一原発の事故で奪われた。それでも職人たちは、別の地で窯を再開しようと苦闘している。「先人も明治維新での逆境を乗り越えてきた。後世につなぐのが責任だ」。突き動かしたのは使命感だった。「相馬焼を絶やすわけにはいかねえ」

原発事故時に大堀相馬焼協同組合の理事長だった半谷 秀辰さん(67)＝福島県二本松市＝らは、県内外に職人がばらばらに避難する中、事故から数カ月後には再開に向けて動きだした。最大の課題は、陶器を焼く際に塗る上薬をどうやって確保するかだった。300年以上続く大堀相馬焼は、大堀地区に近い山中で採れる花こう岩「砥山石」を砕き灰と混ぜて上薬にすることで、「青ひび」という地模様を表現してきた。その砥山石の採取地も帰還困難区域となり、調達できなくなった。



原発事故前の大堀相馬焼の作品(左)と、事故後に上薬を再現した作品(右)を示す半谷秀辰さん＝福島県二本松市で

## ◆避難先で再開も窯元は半減

相馬焼は、相馬藩お抱えの名産として江戸時代栄えていたが、江戸から明治になり、藩からの支援がなくなった。この危機を乗り越えるため二重焼が特徴として生み出された。差別化を図って生き残るためだ。この伝統を守るため、福島県の研究所が職人らが持ち出した砥山石の成分を分析し、市販の土や鉱物を組み合わせて上薬の再現を試みた。100回以上の試作と失敗を繰り返し、完成したのは震災翌年の2012年春ごろだった。職人らは避難先でそれぞれ窯を用意し、再現された上薬を使って制作を再開させていった。今は、福島県内の8市町村で9軒、長野県で1軒の計10軒が活動しているが、事故前の23軒からは半減した。今年3月、国道6号沿いの道の駅「なみえ」に隣接する場所に、大堀相馬焼の展示販売や陶芸体験ができる施設「大堀相馬焼伝承館」が開館する予定だ。各地で活動する職人らが交代で伝承館に詰めるという。だが、本来の産地に戻れない窮状に変わりはない。組合の現理事長の小野田利治さん(58)＝福島県本宮市＝は「常連客から『今までの相馬焼と色が微妙に違う』と言われることもあるし、大堀ではないところで作ることに葛藤もある」と話す。それでも、今できることを考え続けていくことに意味があると信じている。「先人は知恵を出し、時代に合わせて形を変えながら逆境を乗り越えてきた。その伝統を後世につないでいくことが、相馬焼を受け継いだ自分たちの責任だ」【大堀相馬焼 江戸初期の1690年ごろに大堀地区で作り始められたとされる。1978年に国の伝統的工芸品に指定された。独特の青みと細かいひびが入った「青ひび」、左向きに走る馬を描いて「右に出るものがない」という意味を表す「走り駒」の絵柄、器を二重にして湯が冷めにくく、熱くても持ちやすくした「二重焼」が特徴。】

